

学 位 論 文 題 名

東北タイの開発と文化再編

学位論文内容の要旨

本論文は、東北タイ地域社会の変動を描出し、それに伴って地域住民や地域組織の文化がどのように再編されるのかを明らかにしようとしたものである。そのさいの社会変動を、地域社会や社会集団の構造上の変動と位置づけ、農業村落、農村家族という部分社会の基礎集団と、工場組織という職場世界、地域開発NGO・NPOという機能集団を分析する。また、文化再編を、社会変動によって影響をうける生活者の価値及び価値表出の行為の変容と同時に、変化に積極的に対応することによって新たな価値と行為を生み出す運動的局面の二面性から捉えようとする。具体的には農村から都市・労働者の世界に移動した人々の文化変容と、知識人やNPO・NGO活動家による新たな開発理念の提唱と地域文化の再編である。

調査の方法は、現地におけるインテンシヴな聴き取りと参与観察および調査票調査を主とし、それに各種の調査資料を加えている。また、国際タイセミナーにおける議論をふまえて、タイ研究の最新の動向を考慮し、今日的なタイの社会変動を考察している。

本論文は、これらの分析を通して現代タイ社会の動態を地域住民の生活のなかに捉えようとする。

本論文は、第Ⅰ部・地域社会変動と文化再編（第1章調査研究の課題と方法、第2章社会変動と地域開発）、第Ⅱ部・農村家族と宗教（第3章家族における互酬性の規範と先祖祭祀、第4章宗教実践の構成と社会変容）、第Ⅲ部・出稼ぎと労働者文化の形成（第5章労働者のアイデンティティ形成、第6章日系企業における労働者のアイデンティティ形成と生活構造）、第Ⅳ部・地域開発におけるNGO・NPOの役割（第7章東北タイ地域開発における開発NGOの課題、第8章東北タイにおける日本語教育支援型NPOの活動と市民交流）、第Ⅴ部・タイの共同体文化論と市民社会論（第9章タイ・アイデンティティと文化研究、第10章現代タイ社会論の課題）から構成されている。

第Ⅰ部は本書の目的と分析視角の提示と先行研究を検討する。第1章では、前近代、近代、後期近代が併存するタイ社会を、変動の過程における個人の自己決定・自己実現の度合い、及び社会的公正の達成から分析する視角を提示する。第2章では東北タイ開発の社会史を検討する。まず開発以前における東北タイ農村社会の構造分析を行い、その後の開発による市場経済の浸透が、土地なし農民と労働者を生み出す階層分解の過程を明らかにした先行研究を詳細に論点整理をしている。また、東北タイの開発政策を検討し、国家の開発主義による開発が上意下達の行政機構のもとで限界をもち、かわってNPO・NGOの役割が大きくなるが、今日では自律的な事業展開が課題となっていることを指摘する。

第Ⅱ部では農業経営や社会的互助慣行の変容のなかでの、農村家族と彼らの生活文化、

宗教活動・意識の変化を分析する。第3章では東北タイの農村における死者供養に込められた社会的意味を探り、先祖祭祀の儀礼は、現実の生活者における互酬性と社会関係の統合を基礎におくことを検証する。その結果、一世帯一家族としての集団性を認められないタイの家族と親族関係を、構造としての屋敷地共住集団、機能としての親族の互助関係、規範としての親族による共働共食の観念から、世帯、屋敷地共住集団、親族の関係性を読み取ることの有用性を指摘する。また、ノーンクーン村のP家を事例として死者供養の儀礼と功德の社会圏を分析する。P家の当主の妻の母の法事を克明に分析し、隣接世代間の互酬性が死者供養を実施させ、死者供養儀礼への参加者は親族、村落を超えて、家族の生活圏にかかわる人々まで及ぶことを析出した。第4章は東北タイ村落の社会構造の変動と文化変容を、制度的宗教実践に対置される慣習的宗教実践の変容から明らかにしている。具体的には、ノーンクーン村の構造変動を分析し、村の慣習的宗教実践は、精霊崇拜の異界観や神霊力への畏怖の念や呪術的儀礼が弱化し、仏教儀礼が中心となるにつれて、その存立要件の社会的コンテクストが村落共同体のレベルから家族のレベルに縮小してきていることを明らかにした。

第Ⅲ部は農村から出稼ぎや移住で都会に住む若者が、労働者としての身体と意識を鍛え上げていく過程を、工場労働者の生活構造と労働過程の分析から考察する。第5章はタイの工業化による労働者のアイデンティティ形成を問う。具体的には、第6章で在タイ日系中小企業C社を事例として、社会経済変動化で労働者化していく農村出身者のアイデンティティ形成と生活構造を分析している。その結果、農村部から移動してきた未熟練労働者が転職と挫折をくりかえすことを検証する。

第Ⅳ部は地域開発NGO・NPOの役割を分析したものである。第7章は1990年以降盛んになってきた市民社会論に対して、東北タイ地域開発における開発NGOが、組織の自立を図りながら、地域住民や都市住民を活動に巻き込んでいく社会過程のなかに、市民社会形成のもう一つの動きを分析している。そして今日のNGOが、サリット政権による開発イデオロギーによる実質的経済開発の遅れを取り戻し、地域住民の自立を促すうえで、大きな役割を担っていることを検証する。第8章は東北タイにおける日本語教育支援型NPOの活動を取り上げている。そこではメンバーの補充、組織運営、ボランティアと有償労働の葛藤等の課題を孕みながらも、メンバーを組織目的に拘束しない柔軟い組織構造を維持しながら市民交流を進めることが、市民社会形成論議における精神的充足という新しい局面に一つの視座を提供しているとする。

第Ⅴ部はタイの共同体文化論と従来の市民社会論を批判的に検討したものである。第9章は植民地勢力に対抗し、近代国家を形成し、経済成長を達成する過程におけるタイ・アイデンティティ形成に、西欧の文化的権力に対峙する共同体文化論が有効に機能したことを指摘する。そしてこれは現代タイ社会で生じている村落共同体の伝統文化と技術を用いて自力更生型開発を推進しようとする農本主義的村落開発運動にも生きている。その意味で、現在、共同体文化論は公定言説化していき、タイ社会の現実を表象する様々なヴァリエーションになる可能性が強いことをいう。第10章では日本の代表的なタイ研究者である北原淳の共同体文化論批判と国際セミナーにおける研究動向を検討し、タイ社会論の課題として、1980年代のタイにおける村落共同体の有無をめぐる論争から、1990年以降の民主化の進展と新中間層の創出における市民社会の形成論議について、共同体論によらない社会論の展開を指摘する。

次いで国際セミナーにおける研究動向をふまえて、今日のタイ社会論および今後の研究課題を検討し、市民社会の基礎としての地域社会の自治の重要性を指摘する。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 松 岡 昌 則

副 査 教 授 金 子 勇

副 査 教 授 栗 山 敬 己

学 位 論 文 題 名

東北タイの開発と文化再編

本論文は、東北タイ地域社会の変動を描出し、それに伴って地域住民や地域組織の文化がどのように再編されるのかを明らかにしようとしたものである。そのさいの社会変動を、地域社会や社会集団の構造上の変動と位置づけ、農業村落、農村家族という部分社会の基礎集団と、工場組織という職場世界、地域開発NGO・NPOという機能集団を分析する。また、文化再編を、社会変動によって影響をうける生活者の価値及び価値表出の行為の変容と同時に、変化に積極的に対応することによって新たな価値と行為を生み出す運動的局面の二面性から捉えようとする。

本論文は、第Ⅰ部・地域社会変動と文化再編、第Ⅱ部・農村家族と宗教、第Ⅲ部・出稼ぎと労働者文化の形成、第Ⅳ部・地域開発におけるNGO・NPOの役割、第Ⅴ部・タイの共同体文化論と市民社会論から構成されている。

第Ⅰ部は、まず前近代、近代、後期近代が併存するタイ社会を、変動の過程における個人の自己決定・自己実現の度合い、及び社会的公正の達成から分析する視角を提示する。次いで開発以前における東北タイ農村社会の構造分析を行い、その後の開発による市場経済の浸透が、土地なし農民と労働者を生み出す階層分解の過程を明らかにした先行研究を詳細に論点整理をしている。

第Ⅱ部では農業経営や社会的互助慣行の変容のなかでの、農村家族と彼らの生活文化、宗教活動・意識の変化を分析する。その結果、一世帯一家族としての集団性を認められないタイの家族と親族関係を、構造としての屋敷地共住集団、機能としての親族の互助関係、規範としての親族による共働共食の観念から、世帯、屋敷地共住集団、親族の関係性を読み取ることの有用性を指摘する。また、ノーンクーン村のP家を事例として死者供養の儀礼と功德の社会圏を分析し、隣接世代間の互酬性が死者供養を実施させ、死者供養儀礼への参加者は親族、村落を超えて、家族の生活圏にかかわる人々まで及ぶことを析出した。さらにノーンクーン村の構造変動を分析し、村の慣習的宗教実践は、精霊崇拜の異界観や神霊力への畏怖の念や呪術的儀礼が弱化し、仏教儀礼が中心となるにつれて、その存立要件の社会的コンテクストが村落共同体のレベルから家族のレベルに縮小してきていることを明らかにした。

第Ⅲ部はタイの工業化による労働者のアイデンティティ形成を問う。具体的には、在タ

イ日系中小企業C社を事例として、社会経済変動化で労働者化していく農村出身者のアイデンティティ形成と生活構造を分析している。その結果、農村部から移動してきた未熟練労働者が転職と挫折をくりかえすことを検証する。

第Ⅳ部は地域開発NGO・NPOの役割を分析したものである。1990年以降盛んになってきた市民社会論に対して、東北タイ地域開発における開発NGOが、組織の自立を図りながら、地域住民や都市住民を活動に巻き込んでいく社会過程のなかに、市民社会形成のもう一つの動きを分析している。また、日本語教育支援型NPOの活動を取り上げている。そこでは柔軟な組織構造を維持しながら市民交流を進めることが、市民社会形成論議における精神的充足という新しい局面に一つの視座を提供しているとする。

第Ⅴ部はタイの共同体文化論と従来の市民社会論を批判的に検討している。タイ・アイデンティティ形成に、西欧の文化的権力に対峙する共同体文化論が有効に機能したことを指摘する。そしてこれは現代タイ社会で生じている村落共同体の伝統文化と技術を用いて自力更生型開発を推進しようとする農本主義的村落開発運動にも生きている。その意味で、現在、共同体文化論は公定言説化していき、タイ社会の現実を表象する様々なヴァリエーションになる可能性が強いことをいう。また、共同体文化論批判と国際セミナーにおける研究動向を検討し、タイ社会論の課題として、共同体論によらない社会論の展開を指摘する。

全体として、本論文は東北タイの社会変動を、変動主体としての地域住民の社会認識と構想から検証し、また、NPO・NGOの分析を通して、「開発」のもつ意味の変化を捉え、また社会の変動の方向性を規定する「文化」の変容を分析することによって、現代における東北タイ社会の性格規定を行った。その成果は、社会的再生産のシステムを文化の領有・支配の構造から明らかにしたことにより、当該学問分野に大きく寄与している。

以上のことから、本審査委員会は全員一致で本論文の著者櫻井義秀氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。